

上條先生を送る

中 田 好 一 (天文学教育研究センター)

上條先生は1961年に本学理学部天文学専攻の博士課程在学中に、天文学教室の助手になられ、炭素星スペクトルや長周期変光星など低温度星大気を中心とした研究を行われた。1965年から1967年にかけてゲッチンゲン大学で過ごされた赤色巨星の大気構造についての仕事をなされた。先生のお話しによれば、恵まれた環境で研究に専念できただけでなく、ヨーロッパ各地の天文学者とも知り合う機会が多く、有意義な2年間であったという。1973年に本学理学部天文学教室助教授になられた。低温度星大気は、藤田良雄先生の炭素星の研究に始まる、いわば日本の天文学のお家芸の一つであるが、上條先生は、低温度星大気構造という柱を中心に、宇宙固体微粒子の実験的研究、赤外天体のスペクトル等の分野に研究を広げられ、多大の成果を上げて来られた。天文学教室の御在籍期間は34年に亘る。

先生は、大変に控え目な紳士であられるが、その陰には頑固なスタイリストが潜んでおられるようである。それは特に先生の研究方法に際立って表れており、混沌とした天体现象の中から、決め手になる物理過程をはっきりと摘出する仕事に高い価値を見出されておられた。炭素星大気中でカーボン粒子が凝結する事を示された御自身の論文はその一例であろう。従って、先生から頂く最上の誉め言葉は「きれいな仕事ですね」である。不幸にして体力だけが頼りの不肖の弟子共はさような御言葉を賜る機会のはなから諦め、観測データの海にもがくばかりある。先生も呆れ果てておいでであろうが、その気振りもお見せにならないのは、見切りをつけられたためかも知れない。

先生はお酒がお好きで、我々もよくお共を仰せ付かった。酒品は円転滑脱でジンの銘柄を論じて

おいでのはずが、いつの間に、オランダの天文学の消長に転ずるといふ具合に話題がつきない。御自宅でお様のお手料理にあずかり、先生のお話に興じたあげく、一同白々明けの大通りを千鳥足で門前仲町から本郷まで歩いて帰ることもしばしばであった。先生の酒量は底無しに近く、何人の院生がグラスを片手に挑んでは返り討ちにあったことだろう。近年、体調を崩されておられたが、病院そのものより、医者にお酒を止められた方がこたえていらっしゃるのではないかと、口さがない弟子共の陰口である。

御退官後は、公務員宿舎から大岡山の御自宅へお移りになられ、千葉大学での講義以外は悠悠自適の生活に入られる。新しい御出発を心からお祝い申し上げたい。

